煙草と悪魔

芥川龍之介

煙草（たばこ）は、本来、日本になかつた植物である。では、何時（いつ）頃、舶載されたかと云ふと、記録によつて、年代が一致しない。或は、慶長年間と書いてあつたり、或は天文年間と書いてあつたりする。が、慶長十年頃には、既に栽培が、諸方に行はれてゐたらしい。それが文禄年間になると、「きかぬものたばこの法度（はつと）銭法度（ぜにはつと）、玉のみこゑにげんたくの医者」と云ふ落首（らくしゆ）が出来た程、一般に喫煙が流行するやうになつた。——

そこで、この煙草は、誰の手で舶載されたかと云ふと、歴史家なら誰でも、葡萄牙（ポルトガル）人とか、西班牙（スペイン）人とか答へる。が、それは必ずしも唯一の答ではない。その

外にまだ、もう一つ、伝説としての答が残つてゐる。それによると、煙草は、悪魔がどこからか持つて来たのださうである。さうして、その悪魔なるものは、天主教の伴天連か（恐らくは、フランシス上人）がはるばる日本へつれて来たのださうである。

かう云ふと、切支丹宗門の信者は、彼等のパアテルを誣ひるものとして、自分を咎めようとするかも知れない。が、自分に云はせると、これはどうも、事実らしく思はれる。何故と云へば、南蛮の神が渡来すると同時に、南蛮の悪魔が渡来すると云ふ事は——西洋の善が輸入されると同時に、西洋の悪が輸入されると云

ふ事は、至極、当然な事だからである。

しかし、その悪魔が実際、煙草を持つて来たかどうか、それは、自分にも、保証する事が出来ない。尤(もつと)もアナトオル・フランスの書いた物によると、悪魔は木犀草(もくせいさう)の花で、或坊さんを誘惑しようとした事があるさうである。して見ると、煙草を、日本へ持つて来たと云ふ事も、満更嘘だとばかりは、云へないであらう。よし又それが嘘にしても、その嘘は又、或意味で、存外、ほんとうに近い事があるかも知れない。――自分は、かう云ふ考へで、煙草の渡来に関する伝説を、ここに書いて見る事にした。

* * *

天文十八年、悪魔は、フランシス・ザヴイエルに伴っいてゐる伊留満（いるまん）の一人に化けて、長い海路を恙（つつが）なく、日本へやつて来た。この伊留満の一人に化けられたと云ふのは、正物（しやうぶつ）のその男が、阿媽港（あまかは）か何処（どこ）かへ上陸してゐる中に、一行をのせた黒船が、それとも知らずに出帆をしてしまつたからである。そこで、それまで、帆桁（ほげた）へ尻尾をまきつけて、倒（さかさま）にぶら下りながら、私（ひそか）に船中の容子（ようす）を窺つてゐた悪魔は、早速姿をその男に

変へて、朝夕フランシス上人に、給仕する事になつた。勿論、ドクトル・ファウストを尋ねる時には、赤い外套（ぐわいたう）を着た立派な騎士に化ける位な先生の事だから、こんな芸当なぞは、何でもない。

　所が、日本へ来て見ると、西洋にゐた時に、マルコ・ポオロの旅行記で読んだのとは、大分、容子がちがふ。第一、あの旅行記によると、国中至る処、黄金がみちみちてゐるやうであるが、どこを見廻しても、そんな景色はない。これなら、ちよいと礫（くるす）を爪でこすつて、金（きん）にすれば、それでも可成（かなり）、誘惑が出来さうである。それから、日本人は、真珠か何かの力で、起死回生の

法を、心得てゐるさうであるが、それもマルコ・ポオロの嘘らしい。嘘なら、方々の井戸へ唾を吐いて、悪い病さへ流行らせれば、大抵の人間は、苦しまぎれに当来の波羅葦僧なぞは、忘れてしまふ。――フランシス上人の後へついて、殊勝らしく、そこいらを見物して歩きながら、悪魔は、私にこんな事を考へて、独り会心の微笑をもらしてゐた。

　が、たつた一つ、ここに困つた事がある。こればかりは、流石の悪魔が、どうする訳にも行かない。と云ふのは、まだフランシス・ザヴイエルが、日本へ来たばかりで、伝道も盛にならなければ、切支丹の信者も

出来ないので、肝腎の誘惑する相手が、一人もゐないと云ふ事である。これには、いくら悪魔でも、少からず、当惑した。第一、さしあたり退屈な時間を、どうして暮していいか、わからない。――

そこで、悪魔は、いろいろ思案した末に、先園芸でもやつて、暇をつぶさうと考へた。それには、西洋を出る時から、種々雑多な植物の種を、耳の穴の中へ入れて持つてゐる。地面は、近所の畠でも借りれば、造作はない。その上、フランシス上人さへ、それは至極よからうと、賛成した。勿論、上人は、自分についてゐる伊留満の一人が、西洋の薬用植物か何かを、日本

へ移植しようとしてゐるのだと、思つたのである。悪魔は、早速、鋤鍬（すきくは）を借りて来て、路ばたの畠を、根気よく、耕しはじめた。

丁度水蒸気の多い春の始で、たなびいた霞（かすみ）の底からは、遠くの寺の鐘が、ぼうんと、眠むさうに、響いて来る、その鐘の音が、如何にも又のどかで、聞きなれた西洋の寺の鐘のやうに、いやに冴えて、かんと脳天へひびく所がない。――が、かう云ふ太平な風物の中にゐたのでは、さぞ悪魔も、気が楽だらうと思ふと、決してさうではない。

彼は、一度この梵鐘（ぼんしょう）の音を聞くと、聖保羅（さんぽおろ）の寺の鐘

を聞いたよりも、一層、不快さうに、顔をしかめて、むしやうに畑を打ち始めた。何故かと云ふと、このののんびりした鐘の音を聞いて、この曖々（あいあい）たる日光に浴してゐると、不思議に、心がゆるんで来る。善をしようと云ふ気にもならないと同時に、悪を行はうと云ふ気にもならずにしまふ。これでは、折角、海を渡つて、日本人を誘惑に来た甲斐（かひ）がない。――掌（てのひら）に肉豆（まめ）がないので、イワンの妹に叱られた程、労働の嫌な悪魔が、こんなに精を出して、鍬を使ふ気になつたのは、全く、このややもすれば、体にはひかかる道徳的の眠けを払はうとして、一生懸命になつたせゐである。

悪魔は、とうとう、数日の中に、畑打ちを完(をは)つて、耳の中の種を、その畦(うね)に播(ま)いた。

*　*　*

それから、幾月かたつ中に、悪魔の播いた種は、芽を出し、茎をのばして、その年の夏の末には、幅の広い緑の葉が、もう残りなく、畑の土を隠してしまつた。が、その植物の名を知つてゐる者は、一人もない。フランシス上人が、尋ねてさへ、悪魔は、にやにや笑ふばかりで、何とも答へずに、黙つてゐる。

その中に、この植物は、茎の先に、簇々（そうそう）として、花をつけた。漏斗（じやうご）のやうな形をした、うす紫の花である。悪魔には、この花のさいたのが、骨を折つただけに、大へん嬉しいらしい。そこで、彼は、朝夕の勤行（ごんぎやう）をすましてしまふと、何時でも、その畑へ来て、余念なく培養につとめてゐた。

すると、或日の事、（それは、フランシス上人が伝道の為に、数日間、旅行をした、その留守中の出来事である。）一人の牛商人（うしあきうど）が、一頭の黄牛（あめうし）をひいて、その畑の側を通りかかつた。見ると、紫の花のむらがつた畑の柵の中で、黒い僧服に、つばの広い帽子をかぶつた、

南蛮の伊留満が、しきりに葉へついた虫をとつてゐる。牛商人は、その花があまり、珍しいので、思はず足を止めながら、笠をぬいで、丁寧にその伊留満へ声をかけた。

——もし、お上人様、その花は何でございます。

伊留満は、ふりむいた。鼻の低い、眼の小さな、如何にも、人の好さそうな紅毛（こうまう）である。

——これですか。

——さやうでございます。

紅毛は、畑の柵によりかかりながら、頭をふつた。さうして、なれない日本語で云つた。

――この名だけは、御気の毒ですが、人には教へられません。

――はてな、すると、フランシス様が、云つてはならないとでも、仰有（おつしや）つたのでございますか。

――いいえ、さうではありません。

――では、一つお教へ下さいませんか、手前も、近ごろはフランシス様の御教化をうけて、この通り御宗旨に、帰依（きえ）して居りますのですから。

　牛商人は、得意さうに自分の胸を指さした。見ると、成る程、小さな真鍮（しんちゆう）の十字架が、日に輝きながら、頸（くび）にかかつてゐる。すると、それが眩（まぶ）しかつたのか、

伊留満（いるまん）はちよいと顔をしかめて、下を見たが、すぐに又、前よりも、人なつこい調子で、冗談（じようだん）ともほんとうともつかずに、こんな事を云つた。

――それでも、いけませんよ。これは、私の国の掟（おきて）で、人に話してはならない事になつてゐるのですから。それより、あなたが、自分で一つ、あててごらんなさい。日本の人は賢いから、きつとあたります。あたつたら、この畑にはえてゐるものを、みんな、あなたにあげませう。

牛商人は、伊留満が、自分をからかつてゐるとでも思つたのであらう。彼は、日にやけた顔に、微笑を浮

べながら、わざと大仰に、小首を傾けた。

――何でございますかな。どうも、殺急(さつきふ)には、わかり兼ねますが。

――なに今日でなくつても、いいのです。三日の間に、よく考へてお出でなさい。誰かに聞いて来ても、かまひません。あたつたら、これをみんなあげます。この外にも、珍陀(ちんた)の酒をあげませう。それとも、波羅葦僧垤利阿利(はらいそてれある)の絵をあげますか。

牛商人は、相手があまり、熱心なのに、驚いたらしい。

――では、あたらなかつたら、どう致しませう。

伊留満は帽子をあみだに、かぶり直しながら、手を振つて、笑つた。牛商人が、聊（いささか）、意外に思つた位、鋭い、鴉（からす）のやうな声で、笑つたのである。

——あたらなかつたら、私があなたに、何かもらひませう。賭（かけ）です。あたるか、あたらないかの賭です。あたつたら、これをみんな、あなたにあげますから。かう云ふ中に紅毛は、何時（いつ）か又、人なつこい声に、帰つてゐた。

——よろしうございます。では、私も奮発して、何でもあなたの仰有（おつしや）るものを、差上げませう。

——何でもくれますか、その牛でも。

——これでよろしければ、今でも差上げます。

牛商人は、笑ひながら、黄牛（あめうし）の額を、撫でた。彼はどこまでも、これを、人の好い伊留満の、冗談だと思つてゐるらしい。

——その代り、私が勝つたら、その花のさく草を頂きますよ。

——よろしい。よろしい。では、確に約束しましたね。

——確に、御約定（おやくぢやう）致しました。御主（おんあるじ）エス・クリストの御名にお誓ひ申しまして。

伊留満は、これを聞くと、小さな眼を輝かせて、二

三度、満足さうに、鼻を鳴らした。それから、左手を腰にあてて、少し反（そ）り身になりながら、右手で紫の花にさはつて見て、

――では、あたらなかつたら――あなたの体と魂とを、貰ひますよ。

かう云つて、紅毛は、大きく右の手をまはしながら、帽子をぬいだ。もぢやもぢやした髪の毛の中には、山羊（やぎ）のやうな角（つの）が二本、はえてゐる。牛商人は、思はず顔の色を変へて、持つてゐた笠を、地に落した。日のかげつたせゐであらう、畑の花や葉が、一時に、あざやかな光を失つた。牛さへ、何におびえたのか、角

を低くしながら、地鳴りのやうな声で、唸つてゐる。
……

――私にした約束でも、約束は、約束ですよ。私が名を云へないものを指して、あなたは、誓つたでせう。忘れてはいけません。期限は、三日ですから。では、さやうなら。

人を莫迦（ばか）にしたやうな、慇懃（いんぎん）な調子で、かう云ひながら、悪魔は、わざと、牛商人に丁寧なおじぎをした。

* * *

牛商人は、うつかり、悪魔の手にのつたのを、後悔した。このままで行けば、結局、あの「ぢやぼ」につかまつて、体も魂も、「亡(ほろ)ぶることなき猛火(みやうくわ)」に、焼かれなければ、ならない。それでは、今までの宗旨をすてて、波宇寸低茂(はうすちも)をうけた甲斐が、なくなつてしまふ。

が、御主耶蘇基督(おんあるじエス・クリスト)の名で、誓つた以上、一度した約束は、破る事が出来ない。勿論、フランシス上人でも、ゐたのなら、またどうにかなる所だが、生憎(あいにく)、それも今は留守である。そこで、彼は、三日の間、夜の眼もねずに、悪魔の巧みの裏をかく手だてを考へた。それ

には、どうしても、あの植物の名を、知るより外に、仕方がない。しかし、フランシス上人でさへ、知らない名を、どこに知つてゐるものが、ゐるであらう。……

　牛商人は、とうとう、約束の期限の切れる晩に、又あの黄牛（あめうし）をひつぱつて、そつと、伊留満の住んでゐる家の側へ、忍んで行つた。家は畑とならんで、往来に向つてゐる。行つて見ると、もう伊留満も寝しづまつたと見えて、窓からもる灯さへない。丁度、月はあるが、ぼんやりと曇つた夜で、ひつそりした畑のそここには、あの紫の花が、心ぼそくうす暗い中に、ほの

めいてゐる。元来、牛商人は、覚束(おぼつか)ないながら、一策を思ひついて、やつとここまで、忍んで来たのであるが、このしんとした景色を見ると、何となく恐しくなつて、いつそ、このまま帰つてしまはうかと云ふ気にもなつた。殊に、あの戸の後では、山羊のやうな角のある先生が、因辺留濃(いんへるの)の夢でも見てゐるのだと思ふと、折角、はりつめた勇気も、意気地なく、くじけてしまふ。が、体と魂とを、「ぢやぼ」の手に、渡す事を思へば、勿論、弱い音(ね)なぞを吐いてゐるべき場合ではない。

そこで、牛商人は、毘留善麻利耶(びるぜんまりや)の加護を願ひながら、思ひ切つて、予(あらかじめ)、もくろんで置いた計画を、実

行した。計画と云ふのは、別でもない。――ひいて来た黄牛の綱（はづな）を解いて、尻をつよく打ちながら、例の畑へ勢よく追ひこんでやつたのである。

牛は、打たれた尻の痛さに、跳ね上りながら、柵を破つて、畑をふみ荒らした。角を家の板目（はめ）につきかけた事も、一度や二度ではない。その上、蹄（ひづめ）の音と、鳴く声とは、うすい夜の霧をうごかして、ものものしく、四方（あたり）に響き渡つた。すると、窓の戸をあけて、顔を出したものがある。暗いので、顔はわからないが、伊留満に化けた悪魔には、相違ない。気のせゐか、頭の角は、夜目ながら、はつきり見えた。

——この畜生、何だつて、己（おれ）の煙草畑を荒らすのだ。

悪魔は、手をふりながら、睡（ね）むさうな声で、かう怒鳴つた。寝入りばなの邪魔をされたのが、よくよく癪（しやく）にさはつたらしい。

が、畑の後へかくれて、容子（ようす）を窺（うかが）つてゐた牛商人の耳へは、悪魔のこの語（ことば）が、泥烏須（でうす）の声のやうに、響いた。……

——この畜生、何だつて、己の煙草畑を荒らすのだ。

* * *

それから、先の事は、あらゆるこの種類の話のやうに、至極、円満に完(をは)つてゐる。即(すなはち)、牛商人は、首尾よく、煙草と云ふ名を、云ひあてて、悪魔に鼻をあかさせた。さうして、その畑にはえてゐる煙草を、悉く自分のものにした。と云ふやうな次第である。

が、自分は、昔からこの伝説に、より深い意味がありはしないかと思つてゐる。何故と云へば、悪魔は、牛商人の肉体と霊魂とを、自分のものにする事は出来なかつたが、その代(かはり)に、煙草は、洽(あまね)く日本全国に、普及させる事が出来た。して見ると牛商人の救抜(きうばつ)が、一面堕落を伴つてゐるやうに、悪魔の失敗も、一面成

功を伴つてゐはしないだらうか。悪魔は、ころんでも、ただは起きない。誘惑に勝つたと思ふ時にも、人間は存外、負けてゐる事がありはしないだらうか。

それから序（ついで）に、悪魔のなり行きを、簡単に、書いて置かう。彼は、フランシス上人が、帰つて来ると共に、神聖なペンタグラマの威力によつて、とうとう、その土地から、逐払（おひはら）はれた。が、その後も、やはり伊留満のなりをして、方々をさまよつて、歩いたものらしい。或記録によると、彼は、南蛮寺の建立（こんりふ）前後、京都にも、屢々（しばしば）出没したさうである。松永弾正（だんじやう）を飜弄（ほんろう）した例の果心居士（くわしんこじ）と云ふ男は、この悪魔だと云ふ説もあるが、

これはラフカデイオ・ヘルン先生が書いてゐるから、ここには、御免を蒙（かうむ）る事にしよう。それから、豊臣徳川両氏の外教禁遏（ぐわいけうきんあつ）に会つて、始の中こそ、まだ、姿を現はしてゐたが、とうとう、しまひには、完（まつた）く日本にゐなくなつた。——記録は、大体ここまでしか、悪魔の消息を語つてゐない。唯、明治以後、再（ふたたび）、渡来した彼の動静を知る事が出来ないのは、返へす返へすも、遺憾（ゐかん）である。……

（大正五年十月）

底本：「現代日本文学大系　43　芥川龍之介集」筑摩書房
１９６８（昭和43）年８月25日初版第１刷発行
入力：j.utiyama
校正：吉田亜津美
１９９８年９月11日公開
２００４年３月11日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。